



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3028 号 2016.5.18 発行

障害者の60%余 年収100万円以下



NHK ニュース 2016年5月18日

生活保護を受けずに暮らしている障害がある人のおよそ60%は年収が100万円以下にとどまっているというアンケート調査を全国の福祉作業所などで作る団体がまとめました。調査を行った団体は、障害者が自立して生活できるような所得保障が必要だと指摘しています。

この調査は福祉作業所などの団体「きょうされん」が、去年7月からことし2月にかけて加盟する全国の作業

所などの協力を得て行い、知的障害者と身体障害者、それに精神障害者など、1万4000人余りから回答を得ました。

まず、生活保護を受けているかどうかを尋ねたところ、「受けている」が11%、「受けていない」が89%でした。「生活保護を受給していない」と答えた人に障害年金に作業所から受け取る工賃などを合わせた年収の総額を聞いたところ、61%が「100万円以下」と答え、合わせて98%が「年収200万円以下」という結果となりました。

団体によりますと、調査に答えた障害者の平均年齢は41歳でしたが、半数余りが「親と同居している」と答え、年齢が高くなってからも親が生計を支えているケースが多いとみられています。

「きょうされん」の藤井克徳専務理事は「障害のあるなしにかかわらず、自立して社会参加していくための経済的基盤が不十分だ。国には障害者個人の所得保障の確立を求めたい」と話しています。

これについて厚生労働省は「障害者が地域で暮らしていけるように、就労の支援や工賃の引き上げなどを進める一方、介護などの福祉サービスを受ける際の負担の軽減にも引き続き取り組みたい」と話しています。

障害者の98%、年収200万円以下で生活 民間団体調査

日本経済新聞 2016年5月17日

障害者の98%が年収200万円以下で生活していることが17日、障害者の通う作業所などが加盟するきょうされん（東京・新宿）の調査で分かった。親と同居している障害者が55%と半数を占めており、親の収入に頼らざるを得ない現状が浮かび上がった。きょうされんは「障害者の自立が厳しい状況を改善してほしい」と訴えている。

調査は2015年7月～16年2月にきょうされんに加盟する作業所などを中心に男女計1万4745人に実施。男性8865人、女性5443人の計1万4308人（97%）が回答した。平

均年齢は 41 歳。

障害別（重複含む）では知的障害が 9381 人と 65%を占め、身体障害 3861 人（27%）、精神障害 3641 人（25%）などだった。

生活保護受給者を除く 1 万 2531 人に収入を尋ねたところ、年収 200 万円以下が 98%で、12 年の前回調査とほぼ同じだった。このうち年収 100 万円以下が 6 割を占めた。

主な収入源は障害基礎年金 2 級を受給している人が 42%、1 級が 36%、自治体独自の手当を受けている人も 8.6%いた。そのほかの収入は作業所で働いて得る月数万円程度の賃金だった。

親との同居は 40 代前半まで半数を超え、50 代前半も 3 分の 1 を占めるなど、親への高い依存度が浮き彫りになっている。

熊本地震から 1 カ月 発達障害者を支える（上） 専用シェルターあれば...

中日新聞 2016 年 5 月 17 日

福岡順子さんと長男の勇成さん。この家電量販店駐車場で 5 日間過ごした＝熊本市南区で熊本市子ども発達支援センターが作った絵本



発生から 1 カ月が過ぎた熊本地震。もともと不安を感じやすい発達障害者は、今も続く余震などで強い苦しみを抱えており、行政やボランティアらによる手探りでの支援が続いている。（編集委員・安藤明夫）



先月十六日深夜、自宅で寝ていた熊本市南区の福岡順子さん（51）は、大きな揺れを感じて跳び起きた。揺れが収まり、暗闇の中で手探りで長男の勇成（ゆうせい）さん（23）の部屋に行き、「揺れが大きかったから、避難しよう」と声を掛けた。

車の中で着替えるため服を準備していると、玄関で勇成さんはパジャマを脱ぎ捨ててしまい、下着姿になっていた。外出するので、いつもの通りパジャマを着替えなければいけないと思ったらしかった。車の中で着替えて、避難所の小学校に向かった。

体育館は、周辺からの避難住民で騒然としていた。耳を両手で押さえ、ぴよんぴよん跳びはねる勇成さん。引きつった表情が、叫んで暴れるパニック症状の寸前だった。「とてもここにはいられない」。そう感じた福岡さんは、四十分ほどで避難所を出て、親子で車中泊せざるを得なかった。

二人の苦労は続いた。

翌朝、自宅に戻っても、勇成さんが車から降りようとしないう。シートベルトを外そうとせず、耳を両手で押さえたまま。「強烈な揺れ、暗闇の中の避難が恐怖の体験で、家に戻るとまた起きると思ったようです」と福岡さん。髪の毛を抜き、頭をたたく自傷行為も現れた。

ライフライン関連の会社に勤める夫は遠方に単身赴任中。地震の発生で熊本に戻って来たものの、会社に泊まり込みで仕事に当たっていた。福岡さん親子二人で配給物資の行列

に並ぶのも難しいため、家から携帯ガスコンロとなべ、米などを持ち出し、車中泊をしながら自炊でしのいだ。

ぐちゃぐちゃになった自宅の片付けを始めたのは、普段通う福祉作業所で昼間に勇成さんを預かってくれた三日後から。家に入るのを嫌がった勇成さんが戻れたのは五日目。家の中を片付け終え、地震の痕跡がなくなった部屋の写真を勇成さんに見せて安心させた。

福岡さんは、熊本県自閉症協会の事務局長を務めており、車中泊を続ける間も、会員からの相談電話が相次いだ。親が付きっきりで世話して身動きが取れないケースが多く、「地震はお母さんのせいだと、息子から暴力を受けた」という痛ましい例も。「専用のシェルターがあればと、つくづく感じた」と話す。

避難生活では、自分の家ではない場所で寝起きし、普段の生活スタイルからかけ離れた形になるが、自閉症などの発達障害者は、そんな状況を受け入れるのに苦しむ。

怖がって家に戻れない子と家族のために、熊本市子ども発達支援センターは「やっぱりおうちがいいな」という絵本を急きょ製作。ウェブサイトで閲覧し、ダウンロードできるようにした。▽家を片付け、安心できる場所をつくる▽分かる言葉で見通しを示すーなどとアドバイスする。

熊本地震から1カ月 発達障害者を支える（下） 安らぎの場はどこに



中日新聞 2016年5月18日
被災からやや落ち着き、語り合うリルビットのメンバー。障害の特性を分かり合った者同士で、気持ちや和らいだ＝熊本市内で

「避難所の音に悩まされて、すっかり耳栓コレクターになりました」。発達障害の一つ・高機能自閉症の大学生ユキコさん（27）＝仮名＝は笑った。

親元を離れ、熊本市内のシェアハウスで暮らして被災。近くの市立体育館

に避難した。聴覚が敏感なユキコさんにとって「地獄だった」という。苦手な救急車のサイレン、ヘリコプターの騒音が頻繁に響く。周囲から耳に飛び込んでくる話し声も気になった。余震の際に一斉に鳴りだすスマートフォンの警報に、何度もビクッとなった。

日常のリズムが崩れたこともつらかった。いつご飯を食べるか、いつ寝るか、見通しがつかない。ユキコさんの発達障害を知らない友人から、被害情報の収集をお願いされたが、何時までやって、どの程度集めればいいのか分からず、夜通しネットにとらめっこした。

我慢は三日目に限度に達した。激しい頭痛と吐き気に襲われ、自分が参加する発達障害の当事者会「リルビット」顧問の精神保健福祉士に助けを求めた。その橋渡りで、同会のフジさん（25）＝同＝のアパートに移ることができて、症状はびたりと止まった。そこで二週間過ごし、今はシェアハウスで日常を取り戻している。

同会の病院職員ナカジュンさん（31）＝同＝も、フジさんのアパートに泊めてもらった一人だ。家は無事だったが、余震のたびに恐怖を感じ、悲鳴を上げてしまう。両親に「騒ぎすぎだ」と責められ、反発するうちに心のバランスを崩し、自分の腕をこぶしでたたき続けてしまう。親元から一時避難して、少し楽になった。

今月七日、フジさんの呼び掛けでリルビットの集会有り、六人が参加した。震災直後の会合では口々に不安や恐怖を語っていた会員たちも落ち着き、穏やかにおしゃべりをして過ごした。それぞれが、周囲に理解してもらえない苦しさを日常的に体験しており、貴重な「安らぎの場」だ。

ユキコさんは、地震後の体験をもとに自作した「当事者災害手帳」を披露した。

自身の診断名、障害の特性、災害時・避難時にほしい配慮、支援機関・担当者名前、

医療機関の連絡先、服用している薬、障害者手帳のコピーなどをまとめた手帳だ。「被災した時のために自分に合ったものを作ってみては」と仲間たちに勧めた。

「発達障害の人たちは助けを求めることが苦手。当事者同士で助け合えるのはすばらしいことです」。日本発達障害ネットワーク理事の辻井正次・中京大教授は話す。

辻井さんによると、台風などと違い、予測のできない地震は一般の人でも不安や恐怖を大きく感じやすいが、発達障害の人はより強烈で生活の混乱が激しくなる。さらに、仕事に行けないなど日常のリズムが崩れると、精神的に調子を崩す場合もあるという。

辻井さんらが今月六、七日に熊本県内の被災地を調査したところ、子どもの支援には発達障害者支援センターや特別支援学校などが頑張っていたが、成人は「何らかのサービスにかかわっていなければ把握は困難」と、後回しになりがちだったという。

「当事者のつながりを強めることも含め、これから力を入れていくべき課題」と辻井さんは強調する。（編集委員・安藤明夫）

障害者施設こだわりバーガー...墨田

読売新聞 2016年05月18日

具だくさんが売りのハンバーガー（墨田区の「空ゆけ未来工房」で）

墨田区横川の知的障害者就労支援施設「空ゆけ未来工房」が、区内で販売されている食材を具に使ったハンバーガーの製造・販売を16日から開始した。注文を受けてから一つ一つ丁寧に手作りするこだわりのバーガーで、販売初日から予想を上回る好評ぶりだという。

未来工房は、障害者の自立支援をする社会福祉法人「墨田さんさん会」が、新たな事業所として4月に開所。施設利用者の作業の一つとして、同法人が運営する別の福祉施設で製造されているパンを活用できないかと考案された。

具は牛肉とタマネギ、トマト、ベーコン、チーズ、レタスの6種類で、トマトベースのソースを使用。単品600円（税込み）でセットは750円（同）。未来工房の1階で販売し、テイクアウトもできる。

初日は30個以上の注文が入ったという。小野坂明夫・施設長は「ハンバーガーを通じて地域との交流が深まり、障害のある人への理解が深まるとうれしい」と話している。



障害者就労支援カフェオープン 西脇のNPO

神戸新聞 2016年5月17日



障害者の就労を支援するカフェ「にこっと」=西脇市寺内

小学校教諭や障害者の親らでつくるNPO法人すまいる（兵庫県西脇市黒田庄町岡）が4月、障害者の就労を支援するカフェ「にこっと」を同市寺内でオープンした。調理や接客を担当する3人は、来店する地元住民との交流を通じて働く意欲を高めている。同法人の職員は「心も体もにこっとできる居心地の良い場所にしたい」と話している。

2013年から多可町内で障害者のグループホームを運営している同法人が、地域の人と触れあいながら働く喜びを感じてもらおうと開業した。

文科相に発達障害の子支援を要望 玉野、総社市長「体制充実を」

山陽新聞 2016年05月17日

文科相（中央）に要望する黒田市長（左）と片岡市長
玉野市の黒田晋市長と総社市の片岡聡一市長は
17日、文部科学省に馳浩文科相を訪ね、中国市
長会の決議を受けて発達障害の子どもに対する特
別支援教育体制の充実を求めた。



決議は、発達障害児の急増を背景に、適切な指
導や支援が受けられるよう特別支援教育担当の教
職員を増員したり、財政措置を講じたりすること
などを求めている。10日の同市長会総会で採択
され、当時の会長だった黒田市長と提案した片岡市長が要望活動した。

要望書を受け取った馳氏は、国会で審議中の発達障害者支援法改正案を念頭に「立法措
置を踏まえて取り組むとともに、研修で専門性を高めたい」と答えた。

黒田市長は「首長も努力しているが、加配や国の予算措置があれば幅広い教育が可能」、
片岡市長は「自治体の財政などで教育サービスの格差があるのは子どもにとって悲劇」と
述べた。

パラ代表候補、さいたま市長表敬 高橋選手「ボッチャを知ってほしい」

産経新聞 2016年5月18日

リオデジャネイロ・パラリンピックのボッチャ日本代表候補、高橋和樹選手（36）が
17日、さいたま市の清水勇人市長を表敬訪問し、「世界の舞台で活躍し、ボッチャを多く
の人に知ってもらいたい」と意気込みを語った。

ボッチャは重度脳性麻痺者らのために考案された対戦型競技で、6球のボールを目標球
にいかに近づけるかを競う。

高橋選手は5歳から始めた柔道で小中学校時代に活躍したが、高校生の頃に頸椎を損傷
する大けがをして鎖骨から下の感覚を失った。ボッチャを始めたのは2年前で、「重度障害
者がアスリートとして戦っている姿を見て凄いと感じた」という。今年3月の世界選手権
では、初出場ながら個人戦準優勝を果たした。

NPO法人の仕事と両立しながら練習を続けているが、競技には平坦な床が必要で、練
習場所の確保に苦労しているという。清水市長に「リオではメダル、東京では金メダルを
目指す。一度競技を見てもらえれば、最後まで逆転が可能な面白さを知ってもらえる」と
アピールした。

バルーン体験 被災者に笑顔 佐賀市が開催

西日本新聞 2016年05月18日

被災地の子どもたちを乗せて青空に舞い上がる熱気
球=15日、熊本県合志市（佐賀市提供）

熊本地震から1カ月を迎え、佐賀市は15
日、熊本県合志市の広場で、障害児と家族を
対象にした熱気球の搭乗体験イベントを開いた。
バルーンのかごには「がんばろう熊本」
と書いた幕を張り、被災地にエールを送った。

避難生活を送る障害児と家族を元気づけよ
うと合志市のNPO法人「NEXTSTEP」が
「青空フェス」を企画し、佐賀市がバルーン



で協力。参加した82人は青空に熱気球が舞い上がると「初めての景色」「気持ちいい」と喜んだという。

佐賀市2016熱気球世界選手権推進室の杠（ゆずりは）精士郎さん（42）は「被災者の皆さんが喜ぶ顔を見てうれしくなった。少しでも元気を送れたと思う」と話した。

合志市では4月16日の本震で震度6強を観測。5月17日現在で、避難所3カ所に76人が避難している。

千葉市美術館で障害者278人のアート

産経新聞 2016年5月18日

千葉市美術館（中央区）市民ギャラリーで17日、障害者278人の芸術作品展「アートフレンズ展」（千葉幕張ロータリークラブ主催）が始まった。今年で17回目。絵画や陶芸、オブジェなど399点が展示されている。22日まで。

開会式のテープカットを務めた東京都葛飾区の会社員、伊東誠さん（42）は自閉症と闘いながら芸術活動が続けており「創作活動は楽しい」と話す。父親の玄さん（73）は「子の生きがいを見つけることが家族の生きがい」とほほ笑んだ。

60代の菊池モモさん（千葉市若葉区）は、出身地・鋸南町の風景を描いた作品など水彩画5点を出品。脳出血を発症し右半身まひと失語症に悩みながらも「もっともっと良い作品を」と前向きな姿勢を口にした。

鑑賞に訪れた木更津市の大学1年、高瀬未悠さん（18）は「クオリティーが高い。身近にあるものをうまく使い表現している」と話し、富津市の酒井通江さん（62）は「感化される作品ばかり。感銘を受ける」と目を細めた。入場無料。【問】同クラブ（電）043・245・3206。

障害者施設で防災訓練 夜の火災想定

読売新聞 2016年05月18日

甲府市羽黒町の障害者支援施設「きぼうの家」で17日、防災訓練が行われた。

夜間に火災が起き、日中より職員が少ないという想定で、近隣住民も協力して入所者を安全に避難誘導する方法を確認。同施設の関係者は「熊本地震も夜間に発生しており、災害時に迅速に対応できるよう住民の皆さんと訓練を重ねたい」としている。

同施設によると、入所者は現在、約100人で、その約9割が車いすで生活。日中は職員が30人ほどいるが、夜間は7人になる。このため、訓練も職員は7人で行い、近隣住民約20人も参加した。

訓練では、ベッドで寝ていた入所者を施設職員が手分けをして車いすに移し、駆け付けた近隣住民が「大丈夫ですか」などと、入所者に声をかけながら、車いすを押して屋外へ避難させていた。

これまでも訓練に参加している近くの主婦、赤坂晴美さん（78）は「住民の一人として、災害が起これば、きぼうの家に駆け付け、地域の全員がけがなく、避難できる手伝いができれば」と話していた。



6歳長女殺害の母「施設に行くの嫌がった」（大阪府）

読売テレビ 2016年5月17日

大阪市西成区で障害がある6歳の長女の首を絞め殺害したとして46歳の母親が逮捕された事件で、母親は「朝、施設に行くのを嫌がったので首を絞めた」と話していることがわかった。大阪市西成区の無職細谷陽子容疑者は16日、自宅で長女花音ちゃんの首を絞めて殺害した疑いが持たれている。警察によると花音

ちゃんは障害があり、障害児施設に通っており、細谷容疑者は「子育てから逃げたかった。自分も死のうと思った」と、容疑を認めている。その後の警察への取材で、細谷容疑者は毎日、施設への送り迎えをし、16日は「施設に行くのを嫌がったので、首を絞めた」と供述していることがわかった。細谷容疑者は犯行後も自宅にいて、3時間経って夫に連絡。警察は、子育てのストレスを背景に衝動的に犯行に及んだとみて調べている。

立ち歩き・暴言…どう接する？ 発達障害の子の対応助言 山本奈朱香



朝日新聞 2016年5月18日
手引を作った愛知県立大の山本理絵教授(右から2人目)と学生たち=愛知県長久手市

小学校や保育園でボランティアをする大学生たちに役立ててもらおうと、愛知県立大学の山本理絵教授(55)らが手引をつくった。発達障害の子どもの接し方について、実例を盛り込みながら助言を送っている。

「授業中にA君は床の上で寝転んだり、席を立って本を探しに行ったり、暴言を

吐いてけんかをしたりという状況でした」

手引で紹介されたボランティア学生の体験談だ。小学3年のA君は高機能自閉症の男の子。注意しても「うるっせえ！」と暴言を吐かれてしまう。障害の特性を学び、「今は席に着く時間だったよね」と具体的に指示したり、「ずっと席に着くことができてえらかったね」と肯定的な言葉をかけたりすると、話を聞くようになった。

大阪女子短大、閉学へ=来年度以降の募集停止

時事通信 2016年5月17日

大阪女子短大(大阪府藤井寺市)は17日、来年度以降の学生募集を停止し、現在の在校生524人の卒業を待って2018年3月に閉学すると発表した。

運営する学校法人谷岡学園によると、少子化の影響に加え、4年制大学や専門学校に希望者が流れて定員割れが続いたことが理由という。

同校は1955年、家政学を学べる場として開学し、これまでに約1万6000人が卒業した。今春は生活科学科、幼児教育科の定員計250人を上回る258人が入学したが、恒常的な定員割れを考慮し閉学を決めた。併設する大阪女子短期大学高等学校は存続させる。

「NPO」という働き方 明確な目的が生むやりがい

産経新聞 2016年5月17日



ホームホスピス「みぎわ」で利用者や家族と語り合う桜井徳恵さん(写真右)=奈良県大和郡山市

営利を第一の目的にはせず、社会貢献を担うNPO法人(特定非営利活動法人)で働く女性たちがいる。中には会社経営から転じたり、企業から転職したりして理想の働き方を見つけた人も。営利目的

ではなかなか手の届かない事業を果たすことで得られる



手応えが、彼女たちをより一層輝かせている。

奈良県大和郡山市の閑静な住宅地にある、ホームホスピス「みぎわ」。末期がんなどの病
気や障害を抱える人、高齢者らの最期を看取る。

「お風呂どうでした？ すっきりしたでしょう」

運営するNPO法人「みぎわ」の副理事長、桜井徳恵さん（47）が風呂上がりの男性
（88）に声をかけた。傍らには男性の入浴を手伝った長女もいて「お父さん、よかった
ね」と破顔する。

「ホームホスピス」とは、人生最期の時を住み慣れた家のような環境で過ごすためのケ
ア付き共同住宅。近年注目され、全国に30軒以上あり、「みぎわ」は今年3月に開所した。

桜井さんは、この春までケースワーカーのキャリアを生かして大阪府内で訪問介護の会
社を経営していた。仕事柄、多くの病院や介護施設を見る機会があり、時間外との理由か
ら、洗濯ができず汚れ物が部屋に積み上げられていたり、トイレ介助にも追加料金がかか
ったり、といった介護の現状に疑問を感じていた。

「営利目的になるとシステム化が進み、ケアが個人の思いに届かなくなることもある」。
そんな思いから、2年前から「みぎわ」の開所準備を手伝った。今春からは経営する会社
を知人に譲り、みぎわで働く。

開所から約2カ月。2人を看取った。そのうちの1人は家族が遠方にいるときに容体が
急変。なんとか家族が間に合うようにと、スタッフは耳元で名前を呼び続け、前から食べ
たがっていたレバー煮を炊いて嗅覚を刺激。無事、家族は最期に立ち会えたという。

「看取りに立ち会う仕事は、営利目的を主眼とする事業では成り立ちにくい。NPOで
しかできないことがあるように思います」

働く親のための訪問型病児保育を行うNPO法人「ノーベル」（大阪市中央区）の広報担
当、吉田綾さん（37）はリクルートホールディングスから転職。同社では結婚情報誌の
営業や編集を担当していた。子育てしながら働くことに理解のある職場だったが、第1子
の子育て中だった吉田さんには、両立が難しいと感じられ、平成22年に退職した。

その後、ホームページでノーベルのことを知り、「出産しても当たり前前に女性が働ける社
会作り」という理念に共感、ボランティアを始めた。正職員に採用され、事務局ではマー
ケティングや編集のノウハウを生かして、ホームページの作成などを行い、現在は広報や
採用も担当している。会社員時代に比べて給与は下がった。

だが残業ゼロ、週2日は在宅勤務という働き方は子育て中の吉田さんにとって理想の働
き方だ。そして、何よりうれしいのは、「地域社会に直接働きかける仕事をしていることを
実感できる、やりがいのある仕事だということ」と力を込めた。

《今週のキーワード・社会貢献力》

非営利という響きから、NPO法人には、どこか、奉仕活動のイメージがあった。しかし
桜井さんと吉田さんの職場を訪ねると、シビアな判断を求められ、営利を目的とする民
間企業での経験も生かされる場であることを実感した。ただ、民間企業に比べると社会貢
献という目的が明確。日々、働くことの目的をしっかりと意識できることが、彼女たちを輝
かせているのだと思う。（安田奈緒美）

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行